
Re: -fated-

岸理徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re: - f a t e d -

【Nコード】

N5590Y

【作者名】

岸理徹

【あらすじ】

“十種の神具”。かつて、地球上に突如として姿を現したその秘室は人の欲望を掻き立て、未曾有の人災“第3次世界大戦”を引き起こした。それから10年ほどたち、全ては過去のものとして新しいスタートを切ろうとした人類の目の前に再び、十種の神具が出現する……。

The die is cast - 1 (前書き)

「Re:」の世界軸の物語の中では、中間ほどに位置する話となります。

もしあなたが、「Re:」の世界観を深く知りたいのならば、「Re: - r i g h t -」もまた見ることをお勧めします。

The die is cast - 1

闇はより黒い闇となり、見えざる者は影すら落とさない

空にたゆたう光は生命の光。地につつろつは一瞬の光

環は途絶えることを知らず

恒久の時を経てやがて汝らの下に光明をもたらさん

己らが迷いしとき、天を見よ

答えはそこにあり

tomorrow what you can do today
P-i]Never put off till

地球が丸いということを見つけたのはピタゴラスだそう。そんな雑学がこの世の中において何の役に立つかは知らないが、彼がもし地球が球体であると言わなくてもいずれ説明はされていたに違いない。

些細なことの連続が世の中を成り立たせる。一年前、アヴァンスが火事で全焼したのも多分その些細な出来事の一つだ。全ては形而下における約束された出来事だったのだ。

そしてこの東京が、あの悲劇を感じさせないほどに変化が見えないのも、そういった要因なのだろう。この大人数が一様に不安を隠しているとは思えない。

「東京はね、眠らないから」

二トは団扇で風を招き入れつつ、夏用にと出した椅子の上で悠然と日陰に身を落とした。ノクスは、その正面に座り、彼もまた同じようにして微かな風に身をゆだねた。

この事務所は先月構えたものだ。元々イギリスにあった事務所が火事で全焼してしまったため、やむを得ず引越してきたというわけだった。最も、火事の原因は放火ではなく火の不始末だとか。まったくもって救いようの無い話だ。

「イギリスとは全然違うな、やっぱ」

「なんとも欧米人らしい欧米基準の考え方だ。」

「……何が言いたいんだ？」

「変わらないのは暇な日常だけだな、相棒」

「……あいにく、暇なのはこの一瞬だけだぞ」

ノクスはポケットから一枚の紙切れを取り出し、二トに渡した。

二トはそれを見て、腰を抜かした。

「こ、こんな仕事マジで来たのか!？」

紙切れには、懸賞金一千万円の文字。目標は、重要人物の保護と

書かれている。

ノクスは静かに立ち上がり、いつものコートを手を取った。

「早速仕事か……ま、悪かねーな」

ニトは半ば楽しげに、白いジャケットを羽織った。

指定された場所に来た二人よりも先に、その場所には人がいた。どうやらそいつが依頼人らしい。

「あ、あの……」

「あなたがヨルドさんですか？」

男性は頷いた。

「お、ビンゴつてわけか。じゃあ早速仕事の開始だな」

ニトはヨルドの肩をたたき、戦艦に乗ったつもりで付いてこいとスマイルを与えた。男性は笑顔を引きつらせながら頷いた。

ニトのテンションというか、雰囲気は非常に独特だ。慣れればなんとすることはないが、慣れないうちは脅威に他ならない。特に内気で人見知りな人間だとその効果は100倍強くなる。

「ふざけてないで行くぞ」耳が強く引つ張られる。

「いたた！ や、止めて」

耳をつままれ、強引に引つ張られながら、ニトは奇妙な物を目撃した。路地と路地の間、さらに細い道の先に、青白い光が見えた。それは消えることはなく、ただじっと存在し続けている。

突然足をとめたニトを見て、ノクスもその隙間を遠く覗いた。確かに、その光は存在している。

「……妙だな」

誰かに見られている気配がする。東京の中心だし人ごみ何だから普通の事だと言えばそうなのだが、“ただ見てる”とか“狙っている”と言うのにはあまりにも弱すぎる気配。これは何だ？

真相も知らぬうちにヨルドに急かされ、足早に駅に向かうことになった。ノクスはすぐに仕事に再集中をかけたが、二トは相変わらず奇怪が気になって仕方がないようだった。

「集中しとけ、二ト」

肩をたたかれ、二トは再び意識をこちらに向けた。

東京駅付近はサラリーマンでこった返して歩いて歩きにくく、煙草やガスの臭いが三人の鼻を刺激した。それはお世辞にも良いにおいとは言い難く、むせかえるような不快感をもたらした。

三人は揃って品川行き切符を買った。品川から京都まで新幹線で移動するそうだ。勿論、二人を連れて。

切符代はヨルドが出した。三人は買ったばかりの切符を改札に通し、山手線に乗りこんだ。通勤ラッシュの時間とかぶったせいか、車内は人でこった返している。ノクスと二トはヨルドの服をつかみ、何かあっても逃がさないよう対策を取った。

しかし、その対策も杞憂のものと終わり、何事もなく三人は品川駅に下車した。

ところが、ハプニングは品川駅から乗り換えをしようとした時に起こった。

「……どうやら、見つかったみたいだな」

二トが後方を指差す。手鏡を使って密かに後ろを確認すると、確かにこちらを尾行していると思われる男二人組の姿が見えた。

二人はヨルドを連れエレベーターに乗り込む。通り過ぎていく二人組が見えたが、おそらく先回りしてくるはずだ。

「迎え撃つしかなさそうだな」

仕事用の黒手袋をつけ、ノクスはドアの正面に立った。二トとヨルドはドアの外側から見たときに死角になる位置に立ち、待機する。電子レンジの出来上がり音にも似た音とともにドアが開かれた。

案の定、例の男たちは外側で待ち伏せていた。腕につけられた紋章からして、同業者に間違いない。

「邪魔だ、失せろ」

ノクスは片手を地面につけた。漆黒に満ちた瞳の奥に、小さな輝きが灯る。彼を中心として光が起こり、やがてそれは明確な形を成して男に襲いかかった。

彼らの足元。コンクリート製の床が突如として隆起し、鋭い槍と成った的確に心臓を貫いた。ところが、もう一人はその一撃をコンマ一秒で回避し、ノクスとは異なる色彩の光を放った。

「お前も能力者か」

ニヤリと笑う男。男はそのまま腹いっぱい空気のため込み、吹き矢のように彼に向って吐きだした。高圧縮された空気は弾丸となつてノクスへ襲いかかる。ノクスはそれらを器用に避け、懐からナイフを取り出し脳天めがけて投げた。鋭い軌道と十分な速度を持つて飛んだナイフは的確に急所を貫き、一瞬にして命を刈り取った。

ころ合いを見て出てきたニトは称賛の拍手を送り、ヨルドは倒れた男たちを見て唇を震わせた。

「見たところ、同業者って感じだな。それもなかなかの有名どころそつだ」

腕にはバラのタトゥーが彫られている。おそらくは“煉獄薔薇”フリムローズの連中だ。

しかし、気になるのはこいつらがヨルドを狙う理由ではなく、ヨルドと連中との接点の方だった。

「お前、元構成員だったのか？」

ヨルドは首を横に振った。

「私はただの技術者だ……。確かに彼らとも関わりはあつたが、別に彼らだけではないし、それほど密接な関係を持つたつもりはない……」

彼は声を震わせながら弁解した。

「……そつかい」ニトは胡散臭そうにボリボリと頭を掻いた。「ただの技術者を狙うほど、奴ら暇じゃないと思うがねえ……」

「ニト！」

ノクスのお叱りを受け、ニトは言葉をつぐんだ。ヨルドは結局何

か言い返すこともなく、ただ黙って地面を見つめた。

このご時世に、こんな職業だ。依頼人がまともな事情を持ち合わせている方が稀だが、少々厄介なことに首を突っ込んだ可能性が高い。そうなれば、求められるのは迅速な解決が速やかな手切だが……。

先ほどの彼の言葉が思い返される。おそらく、アヴァンスが手切を行えば彼は間違いなく他の連中に殺されるに違いない。

アジトをようやく見つけ、いよいよ本格的に動こうとしているタイミングで、厄介事には首を突っ込みたくはない。だが、見捨てる気にはなれなかった。

「……あなたにどんな事情があるかは知らないが、一度受けた依頼だ。最後までやり遂げさせてもらおう」

ただし、と続ける。

「隠し事は無しだ。特にあなたの経歴についてはな」

ヨルドは目をそらした。よほど触れられたくない代物らしい。だが、この先どんな敵が襲いかかってくるか分からない以上、次にどのギルドが来るのかを判断するための、手掛かりになるものはできるだけ多く手に入れておきたい。

そんなノクスの思惑をヨルドは理解してか、口を開いた。

「……“18次元干渉装置”って、知ってるかい？」

二人は揃って首を横に振った。だろうな、とヨルドは話を続ける。

「その装置を使えば、代理人ケラントと盟主クレストの繋がりを絶つことができるんだ」

「繋がりを絶つたど？ そんなことができるのか？」

ヨルドはポケットから小型の電子盤を取り出し、二人に見せた。

一見普通の電子盤に見えるのだが、どうやらただの電子盤ではないらしい。

「これには最先端の先を行く技術が詰まっている」電子盤は再びポケットの中へ戻った。

「最先端の先……“ボイドギアテクノロジー”か？」

二トは何処からともなく知らない単語を引つ張り出してきた。ヨルドは頷き、それに関する説明を始めようとした。が、ノクスは手で制した。

腕時計を2人に見せ、時間が迫っていることを示す。次の新幹線まであと4分もない。急がなければ、乗り損ねてしまう。

「続きは車内で聞こう」「手袋を脱ぎながらノクスは言った。「とりあえず、新幹線に乗らなければ」

階段を駆け上がり、新幹線の乗り場へと向かう。改札に切符を通し、ホームにたどりついたと同時にそれもまたホームに辿り着いた。切符に記された番号の座席に座る。窓の外を確認するが、先ほどの連中とかかわりのありそうな人影は見当たらなかった。

二分後、新幹線は滑るように動きだす。目的地、京都へ向けて……。

新幹線内で面白いことをヨルドから聞いた。それは、ボイドギアと呼ばれる謎の技術の事についてであり、第18次元に隠された謎でもある。

“ボイドギアテクノロジー”のカテゴリーズが確立されたのは何十年前のことだった。それはまさに夢のような技術であり、それが確立されれば全ての動力がコスト無しに起動できるとさえ言われた。

しかし、それは実現しなかった。

ボイドギアを作り出すためには大量のネットワークが必要になる。“全ての人の繋がり”がボイドギアの機動力になるのだが、当時の技術者たちはそれを作り出すことも、その正体を知ることでもできなかった。そこで、不器用な人間は考え出した。大量の人間を使って実験を行うことを。

「つまり、それが例の集団失踪事件の裏つてわけね」

二トは自分自身で納得し、うんうんと頷いた。が、ヨルドは首を振った。

「私もそう思っていた。だがどうやら、違っらしいんだ……詳しくは知らないけどな……」

彼が知りうるボイドギアに関する情報はそこまでだった。それが違っといわれる理由も尋ねたが、彼はただそうらしいということを知っているというだけにすぎなかった。

「第18次元とボイドギアは密接な関わりを持っている。私たちは長年の研究の末第18次元の“位置”を知ることができたが、それ以外のことは何も分からなかった」

彼らの研究は非常に難解で大半が理解できなかったが、“第18次元がこの世界とは別の世界である”ことは理解できた。つまり、第18次元はパラレルワールドでもなければ亜空間でもない、まったく異なる歴史をたどってきた世界だったということだ。

「その世界の構造も、何故この次元と接点を持ったのかも、分からない」

ヨルドは研究者らしい溜息をついた。

「で、そのこととこの逃避行に何の関係がある」

二トは難しい話は好きではないタイプだ。今飛び出した言葉はおそらくその性格が原因で喋った言葉だ。

ヨルドはしばらく、黙り続けていたが、窓の外に富士の山が見えるとともに、口を開いた。

「私は知ってしまったんだ。“知られざる者”の正体を……」

「知られざる者？」

そのワードを聞いて思いつくものは一つしかない。

「失われた番号^{ロストナンバー}……か……」

「……っばいな。あの女が言ったのは本当だったってことか」

数日前、盟主^{クレスト}に呼び出された事を思い出す。その時彼女は、“知られざる者”についての情報をなるべく多く集めることを、ノクス

に課した。

「で、そいつの正体ってのは？」

ヨルドはポケットから白紙を取り出すと、ペンの代わりに爪で紙に傷をつけた。

「これは暗証番号だ。こいつを使えば、エフティージェブンFT7のサーバー内にある君たちの知りたい情報を手に入れられるはずだ」

彼はそう言つて、ノクスの手の中に小さく折った紙を収め、握らせた。

「いいのか？ 俺たちに渡して」

「ああ、構わん。というよりも……」フツと、彼は小さく笑つた。「君らに渡すように頼まれたのだがな」

ニトはそれが誰か尋ねたが、ヨルドは笑つて、直に分かるとしか言わなかった。そして全てを話し終えた後、ヨルドはつかの間の眠りについた。

すやすやと眠るヨルドの両隣、ノクスとニトは彼を無事に送り届けるべく常に神経を研ぎ澄ませていた。ところが、代理人までもを差し向けてきたというのに、それ以降は音沙汰無しで、何事もなく京都まで辿り着いてしまった。

「順調すぎるな……嫌な予感がする」

ニトの小さな呟き。言葉は魂を持ち、時に言霊とさえ呼ばれるが、ノクスは当然信じてなどいなかった。

そう、次の一瞬までには。

ヨルドらが京都駅から外に出るのとはほぼ同時に、バスターミナルに止めてあつたバスが突然爆発した。

「一体何が」

ハツとして後方を向く、ところが、先ほどまで確かにそこに存在してたはずのヨルドが、消えうせていた。

「おい、おっさん！ 何処行つた！」

ニトは周囲をひたすら見回す。ノクスは彼とは異なり、ただ黙つて目をつぶり、神経を研ぎ澄ませる。代理人とただの人間を見分け

る方法はいくつもあるが、相手の代理人の居場所を知りたいときは、その姿を確認するのではなく、代理人の持つ独特の雰囲気 強い思念を手繰り寄せる方がずっと効率的でかつ的確なのだ。

「……そこか！」

ノクスは懐からナイフを取り出し、投げた。すると、何も無い空間から突然男が出現し、頭から血を流して倒れた。倒れた男の腕には、またしても薔薇のタトゥーが……。

「手遅れか……」

ただの人間を探る手段はない。そして今、その行方について最も知っていそうな人間は既にこと切れてしまっている。手掛かりがない以上は、どうしようもない。

ノクスは身を翻し、京都駅の中へと歩き始めた。二トはしばらくの間ヨルドの事を探し続けたが、辺りが完全に夜に化けると同時に諦めた。

それから彼らは新幹線に乗り、元の自分たちのアジトへと戻った。その後のヨルドの話は何も聞かず、生死うら分らない。最終的に二人の元に残った彼の軌跡は、彼の残したメモによってもたらされた情報だけだった。

ただ、今にしてみれば彼はただこの為だけにこのギルドへ依頼を持ってきたのだ。誰が、何のために、彼にこのようなことをさせたのかは分からない。分かるのは……。

これがただの始まりにすぎないこと、ただ一つ。

その夜、ノクスは一人寝室で月を眺めていた。麗しき月の光の下、彼は妹の写真に手を伸ばした。

「まだ、見つからないようね」

刹那、自分の体の上に何かが乗った感触がした。

「……あんたか」

華やかな服装に身を包んだ女性が、その柔らかい感触をノクスに示すかのようにあてがう。ノクスはその甘い誘惑を意にも介さず、ただ月を見た。

「お前は、本当に何も知らないのか？」

女性は妖しく笑う。

「それは、嘘かも知れないし、本当かも知れない。けれど、私が知っているかどうかは大した問題ではない……」

そうでしょ、と彼女はノクスの鼻先に指をあてた。彼はその手を払う。

「あいつは必ず、俺が助ける。今度こそ、な」

それは懸命ね、と彼女は他人事のように言った。そして彼女は、恋人のように、彼の体に身を預け、その整った顔つきを彼の顔の横にたむけ、耳元で囁く。

「私から言えることはただ一つ」ジロリ、とノクスの瞳が動く。「あなたに託した私の力が、必ずあなたを彼女の元へ導いてくれるわ」舌を絡めるキスの後、彼女はすう、と消えた。ノクスは彼女が消えてから少し後にベッドから起きて、歯磨きを直した。

いつの間にか眠っていたらしい。目が覚めたときには既に朝だった。ふと、右手に違和感がしてみると、丸まった紙が握らさっている。

注意深くその紙を開くと、女性らしい書体で文章が書かれている。

『次受ける依頼はなんでもいいけど、星占いによるとあなたと涙は相性が悪いみたい。気をつけてね』

彼女らしい言伝の内容だ。ノクスは紙切れをくず籠に捨て、大きく背伸びをした。

「おっと、朝っぱらから景気のいい……」

扉を開けたのは他ならぬニトだった。

「朝帰りか？」

「まあな。土産としちゃあれだが一つ依頼を持ってきた」

ニトは折りたたまれた洋紙を開いた。赤色で、ターゲット名が書かれているということは……。

「久々の殺しの仕事だな」

今回のターゲットは“戸島校一郎”^{としまこういちろう}という成金野郎だそうだ。依頼者はさしずめそいつに騙された被害者といったところか。

ノクスは机上に置かれたハンコを手に取り、受理を表す印を押した。ニトはそれを受け取り、喜ばしそくにアジトから出て行った。

再び静けさが戻った室内。その間隙を十分に楽しんでから、ノクスは着替えを手に取った。

東京ラージサイト、その施設内で催される一大イベント・“メカニカル・ショー”を目当てにやってくる客は毎年百万人以上だそう。入場料に400円を要するこのイベントの収益は最低でも4億に上る。そしてその全てを牛耳るのが、戸島校一郎とその配下、“戸島コーポレーション”。最先端技術“ドライブギア”の第一人者

として名をはせている戸島コーポレーションだが、その裏で蔓延る闇は相当なものだ。噂によれば、かつて起きた戦争において残虐非道なまでの仕打ちをしてきたそうだと。

情報提供者である長井黒菜は、この会社の事を『腐ったミカン』と称していた。

「腐ったミカンか……なるほど」

いかにも悪そうな顔を遠目で見つめながら、二トは呟いた。壇上には、戸島コーポレーション代表・戸島校一郎の姿が。

「で、いつやんの？」二トはフーセンガムを膨らましながら、ライフルを構えたふりをした。

「まあまで。今はまだ早い」

ノクスはどこか腹黒い老人の表情を見つめ、溜息をついた。

「あんな顔のどこに奴らは惹かれたんだろうな」

代表の取り巻きはせつせと老人の世話をしている。例えるならば、ホームヘルパーというよりは、清掃員に近いかもしれない。

人を殺すことは何より簡単なことだ。だが難しいのは、人間がいたことを消すことなのだ。その点だけに関して言えば、殺す側も殺される側も、大差ない。プロとアマチュアの違いというのはそこに表れるのだろう。

では、俺たちはどうか。答えは、プロだ。

「種まきは終わった」

ワイヤーの端を持った男が二人に近づいた。彼は、依頼者から派遣された補助要員の男だ。

「こんなんでどうすんの？」訳が分からないといったような表情で、端を二トに渡した。

「まあ見てなつて」

ワイヤーの端を持った二トは、不敵な微笑みを浮かべた。次の瞬間、二トを中心に弱い発光現象が起こったのと同時に、壇上で悲鳴が上がった。

「なるほど……」

男は感心したようで、二トに興味深げな眼差しを向けた。

「便利な力だな。うらやましい限りだ」

まあな、と二トは誇らしげに笑った。だがその笑みは一瞬にして真剣な顔つきに戻った。

「……あまり和んではいられなさそうだぞ」

強烈な敵意に先に気づいたのはノクスだった。その言葉に連動するよつに、二トと男もスイッチを切り替える。敵意のする方向は壇上。見れば、3人の男女がこちらをじつと見ている。

「……恐らく代理人だ。油断するなよ？」

ノクスは手摺の上ののり、壇上めがけて一気に跳ぶ。

「正面はあいつに任せて、俺達は裏手に回りこむぞ」

二トは左手、男は右手にそれぞれ分岐し、ノクスの援護にまわるところが、既にそういう動きを見せることは読まれていたらしく、角を曲がるや否や数十人の警備員に取り囲まれた。

「邪魔なんだけど！」

再び二トを中心に発光現象が起こり、次の瞬間には何十人と言う警備員達がいつせいにその場に崩れた。中には泡を吹きながら痙攣を起こしている人もいる。

二トはその中の、適当な警備員の懐から警棒と拳銃を奪い取り、宙を舞うノクスへ向かって投げた。ノクスはそれを上手くキャッチすると、銃口を、包丁を持った少女へ向け、引き金を引いた。一発、二発と放たれた弾丸は狂うことなく少女へと走っていったが、見えない壁に弾かれ、虚しく地面を転がった。

「空気の壁か……厄介だな」

滑らかに、そして綺麗に着地したノクスの正面には、男が二人と女が一人。3人ととも代理人とみた。

ノクスはそのままの姿勢で、両手の手の平を地面につけた。弱い発光現象と共に、三人の正面の地面が突如隆起する。そして、それとほぼ同時に、彼らの背後からコンクリート製の槍が飛び出した。

完璧に不意を突いたように見える一撃。しかしそれらは、空気の

壁によって阻まれた。

「噂には聞いていたが……」突如、背後から声が聞こえた。「実在したとはな……“夜の王”」

振り下ろされた鉄槌。その一撃は地面を砕き、すさまじい爆音を生み出した。十センチ先も見えなくなるほどの噴煙が舞い、あたりを一瞬にして包む。

「俺も有名になったもんだ」鉄槌を振り下ろした男の体を、這うように流れる血。男は自らに滴る血を見て、驚愕した。

深々と突き刺さるナイフは首の中心を確実に捉えていた。男はその後一言も喋らぬまま、地に伏した。

「だが、“夜の王”は卒業したんでね」

銃口から弾丸が打ち出される。太めの男は空気の壁を作り出し、防ぐ。

「無駄だ。その程度ではこの壁は崩せない」

「分かってるよ、そんなもん」

ノクスは警棒を片手に、正面から空気の壁を叩く。

「だから無駄だと」

発光現象の後、見えない空気の刃が男を貫いた。

「な、なに……!?!」

男は、がっくりと膝から地面に崩れた。綺麗に空いた穴からは赤い地面がよく見える。

既に虫の息の男から包丁を持った少女へ視線を移す。少女はただ無表情にノクスを見る。

「帰れ。余計な殺生は好きじゃない」

だが少女は動かない。代わりに、手に持っていたナイフを床に落とし、ゆっくりとこちらに歩み寄る。

「お兄さん、おなか減った」

気の抜ける腹の虫の鳴き声が響く。

「……そうか。じゃ何かおごってやるよ」

ポン、と頭を撫でる。少女はノクスに寄り添い、服の裾をギュッ

と握った。

壇上には先ほどの電気ショックで気を失った老人が一人、取り残されている。周囲にいた取り巻きは既に骸と化した。

ほどなくしてニトと補助の男と合流し、泡を吹く老人の傍に屈んだ。手には、拳銃が一丁。

「すまんな、仕事なんだ」

パン、と風船のはじける音が、会場に轟いた。

「で、事後処理はうまくやってくれるんだろうな？」

車内、ノクスは黒菜に確認する。黒菜は頷き、たった今すれ違ったワゴンの車を指差した。

「あれが、そうだよ」

無事にターゲットの抹殺を達成したということで、黒菜に依頼を持ってきた組織が事後処理を買って出てくれた。本来そういった諸々も請け負ったギルドの仕事なのだが、今回は特別ということらしい。

後部座席に座る二人の男の間に座る少女は、コンビニで買ったばかりのおにぎりをおいしそうにほおばっている。その顔つきは何とも幸せそうに見える。

「そっぴや、お前の名前は？」

少女は決して食する手を止めなかったが、口にご飯を頬張りながら名前だけは名乗ってくれた。

「アリス」

「能力は？」

「触れたものの記憶が分かる」

「いまちピンとこない能力。ニトはどういった能力なのか詳しく知りたいらしく、アリスに色々と尋ねたがアリスは何一つとして答

えなかった。

「まあ、それよりも」ノクスは黙々と運転を続ける男性に問いかけた。「あいつを殺す理由って、なんだ？」

男はその質問にしばらく黙りこくっていたが、赤信号で車が停止すると同時に、口を開いた。

「十種の神具”って知ってるよな？」

ノクスは頷き、ざっと概要を答えた。

「ああ。……最近になって再びそれらを集めているコレクターが現れたらしい」

赤信号が青へ変わる。滑らかにワゴンは走り出した。

「今更だな。だいたいあのうちの半分は十年前の戦争で破壊されちまったはずだろ？」

十年前の戦争 後に第3次世界大戦と称されることとなったこの戦争で、失ったものは数知れず、得たものは皆無に等しい。そしてその傷跡は未だ言えることは無く、都内のあちこちで崩れたままの建物や地面が残っている。

この戦争に勝者は生まれず、大国アメリカは大きな損失により以前のような地位を失った。勿論アメリカに限らず、核を保有していた国の大半がGDPを戦争開始前の約半分以下にまで落とす結果となった。

「一般的にはな。だがそれらは“決して壊れない”ってことがつい最近になってわかったんだ。……つまり、この事実がどういうことを指すか、分かるな？」

それは、十種の神具が今でもそのままの姿で存在することを示し、同時に人の欲を掻き立てる“起爆剤”になりうることもまた示していた。

「このことは一般的には公表されていないが、情報機関と深い関係を持つ財閥の奴らには既に漏洩している」

「で、あんたらは危機感を持ったってわけね。奴らの欲望によって再び戦争が起こることを」

男はミラー越しに頷いた。

「それだけは何としても阻止する必要がある。そこで」

「国境も法律の枠も越えたギルドに頼んだ、ってわけね」

再び男は頷いた。

ギルドは正式な職業として認可されていない、いわば例外的な職業で、法律等による援助を受け取れることは出来ないが、代わりに通常よりも格段に広い行動圏と法律の枠を超えた仕事を遂行できる“自由”を得た。

警察や軍隊では手続きやなにやらが障害となり、迅速な対応にどうしても遅れが出てしまう。そこで、政府はギルドを利用することを思いついたようだ。

「じゃあ、事後処理をしてくれる組織ってのは……」

「ああ。政府の人間が行う」

まがりなりにも人殺しとなる行為を、政府がもみ消すという予想外の事態にノクスは驚いたが、一方のニトは嬉しそうな顔をした。

「え、じゃあ合法的に殺人が認可されるってことか」

ところが、男は首を横に振った。

「認められるのは“政府の依頼”に対してのみだ。個人依頼などには適用されない」

政府の越権行為じゃないのか、とノクスは指摘した。ニトもそれに同意し、口をそろえて抗議を始めたが、「俺に言うな」という男の言葉で、小さなデモはおさまった。

「政府も、焦っているのよ」黒菜は頬杖を突き、窓の外の景色に目を浸す。「再び戦争が起これば、こんどこそ世界は真の意味で滅びるわ」

それは決して脅しでも、陳腐な憶測話でもない。かつてのあの戦争を体験したからこそ言える、確実な未来の出来事。そして、その未来を阻止するのは誰か。元々人が起こした業が元凶であるのなら、その業を絶やすのもまた人の役目であろう。

「これは人類全体の問題だ。ギルドの人々に押し付けるのは間違い

だと分かっているが、頼れるのは君たちしかない」

「……ギルドだって、神具を収集しようとするかもしれないぜ？」
「分かっている。そういうギルドに対しては、我々が潰しにかかるつもりだ」

彼らの眼差しは真剣そのものだった。腹を決めたと見える、鋭い眼光。

断る理由もなく、特にかの戦争といわくのあるノクスにとって、協力する以外の手は残されていない。恐らく、男の上司はそう見込んでこの仕事を彼に委託したことだろう。

だが、その思惑は見事に外れることとなった。

「事の重大さは理解できた。が、俺達は全面的協力はできない」
信号もないのに車が急停止した。

「……何故だ？」

「血生臭いにおいがしてならねえ。とてつもない裏があるような悪い予感がする」

ノクスの言葉に、男は何もいえなかった。男だけではなく、黒菜もまた、何も言えずにいた。

「あんた達はその裏であるとは思っちゃいないが、危ないことに変わりはない」

ノクスは懐の財布から小銭を何枚か掴み、強引に黒菜に握らせ、車を降りた。ノクスに続いて、少女と二トも車を降りる。そのあと直ぐに補助席の窓が開き、そのうちの最も大きい金額の小銭をノクスに返した。ノクスはそれを何も言わずに受け取り、踵を返して闇に溶けていった。

彼らの背後で、黒塗りのワゴンはひっそりと進みだし、反対側へと消えていった。

「いいのか？ 断っちまって」

二トは名残惜しそうに背後を振り返った。もうすでにその車両は見えなくなっていた。

「人も組織も、コインと同じだ。見る人、角度で表と裏が入れ替わ

る」

宙にコインが舞う。放物線を描き、ノクスの手の手平へと舞い戻る。ふたとなつてゐる手が除かれたとき、ノクスは微笑みを浮かべた。

「これも運命だ。なるようになるさ」

二トは彼の手の平の上のコインを覗き見て、同じように笑みを浮かべた。

「だな。頼りにしてるぜ、相棒」

白と黒、二色の異なる上着を羽織つた男二人は、星空の下帰路に着いた。

「……そついやお前、家は？」

先ほどからずっと裾を掴んだままの少女は、何も答えず首を横に振つた。見た目からあの老人の孫とは思えないし、どこからか拉致されたか、あるいは孤児院の出身かもしれない。

「分かつた。居場所がないなら、俺たちが新しくお前の居場所になつてやる」

少女は何も答えず、顔色一つ変えず、ただコクリと頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5590y/>

Re: -fated-

2011年11月17日03時26分発行